

次年度に向けて

令和4年は、6月上旬と8月の低温・日照不足によって大幅な減収に繋がりました。近年多発する異常気象に対応するためにも基本技術の励行が必要です。健苗育成（活着良好な苗）、適切な田植え作業（時期、栽植密度、植込本数の確認、植付深の調整等）、生育・気象条件に対応した水管理（浅水、深水、適期中干し）等を徹底し、収量・品質の安定化を図りましょう。

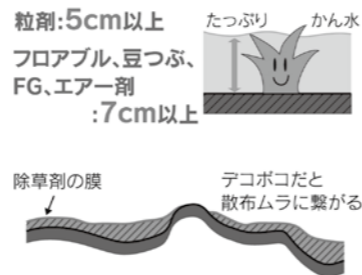
ポイント1 気候変動リスクを軽減する総合的な土づくり

高品質・良食味米を安定的に生産するためには、排水性の向上や土壌養分の均一化、地力の増強や根域を深く拡大させ根を健全に保ち、生育途中の急激な葉色低下や生育の停滞を防ぎ、登熟後半まで根の養水分吸収能力や葉の光合成能力を高く持続させることが重要です。排水不良水田では、溝掘り、明きよの施工で表面停滞水の排水を図り、暗きよ、補助暗きよの施工によって透水性を改善しましょう。近年、耕深が浅い傾向にあります。少なくとも耕深15cmは確保するようにします。ただし、深耕によって下層のやせた土が混入したり、深耕に伴う適切な肥培管理を行う必要があるため、深耕は一挙に行わず、年数をかけて徐々に深くしましょう。当管内の土壌はケイ酸が不足傾向であるため、継続的な補給が必要です。ほ場にケイ酸が多くあることで異常気象に耐えられる稲体に仕上げられます。また、定期的に土壌診断を行い、診断結果に基づき必要な量の堆肥や土壌改良資材、化学肥料をバランス良く施用していくことが重要です。



ポイント2 雑草防除

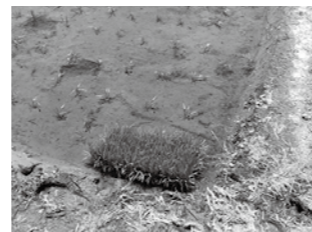
近年、生育後半におけるノビエ等の発生が目立つほ場が散見されます。雑草の多発は害虫の発生にも影響し、多発してしまったほ場は埋土種子量が多いと考えられるため、除草剤を適期に効率的に使用して雑草防除の徹底を図る必要があります。除草剤は、雑草の種類と量に応じた適切な剤を選択し、適期に使用するとともに、使用上の注意を守り、除草剤使用後7日間は止め水として水質汚染防止に努めましょう。除草効果を十分発揮させるためには、畦畔補修等の漏水対策や田面の均平、ほ場条件に合わせた剤型（フロアブル、ジャンボ剤等）の選択が効果的です。また、水田周辺の水系など環境に配慮し、移植前には除草剤を使用しないようにしましょう。



ポイント3 いもち病防除対策

本田におけるいもち病の発病の主因は、育苗施設からの発病・感染苗の本田への持ち込みです。その他、乾燥状態で冬を越した稲残さ（稲わら・籾殻）も伝染源となります。よって、前述の稲わら・籾殻を育苗施設から撤去し、適正かつ効果的な種子消毒、育苗期いもち防除で持ち込みを最小限に抑え込むことが重要です。

特に今年、葉いもちの発生が見られた人は、次年度は上記の耕種防除とベンレート水和剤、ビームゾルのいずれかで育苗期いもち防除を必ず行い、本田葉いもち防除には育苗箱処理剤を使用して穂いもちの被害を未然に防ぐよう努めましょう。なお、疎植栽培や高密度播種苗栽培では、側条施葉装置を用いた防除が望ましいです。また、出穂期前後が多湿の年は穂いもちが多くなりやすいので、穂いもちの適期防除に努めましょう。



余り苗は早期処分を！



No.7

農業技術情報

令和4年12月発行

発行：秋田おぼこ農業協同組合／秋田県農業共済組合仙北支所
監修：仙北地域振興局農林部農業振興普及課

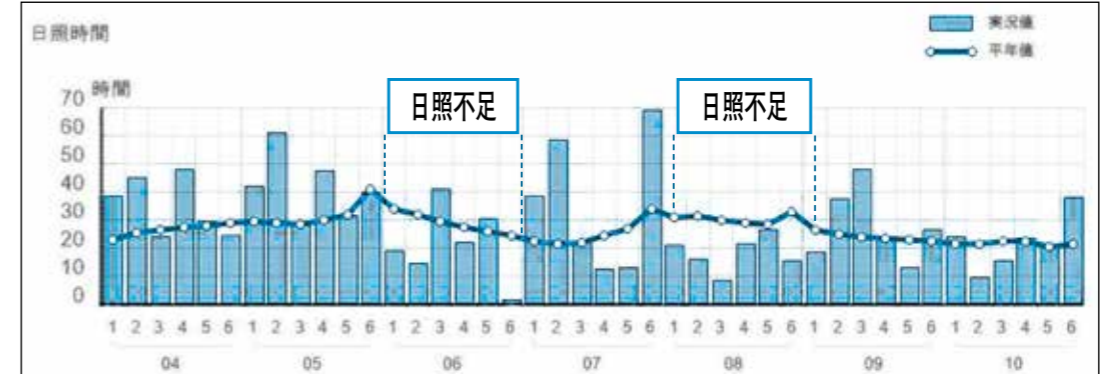
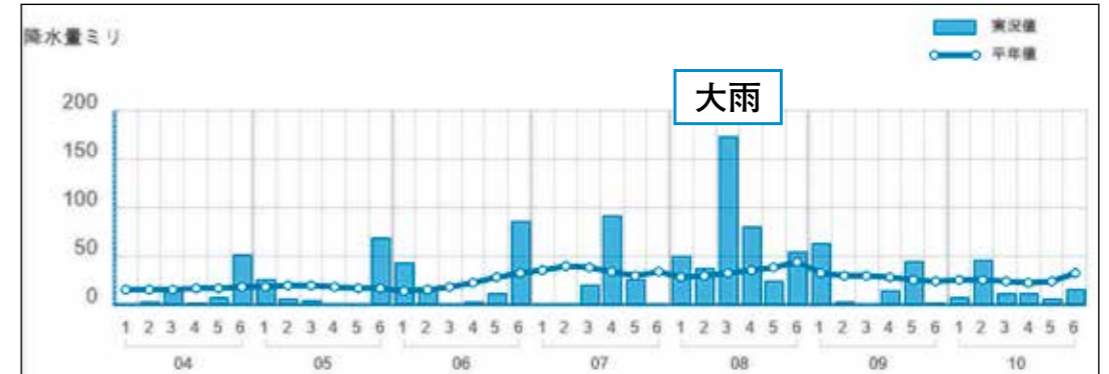
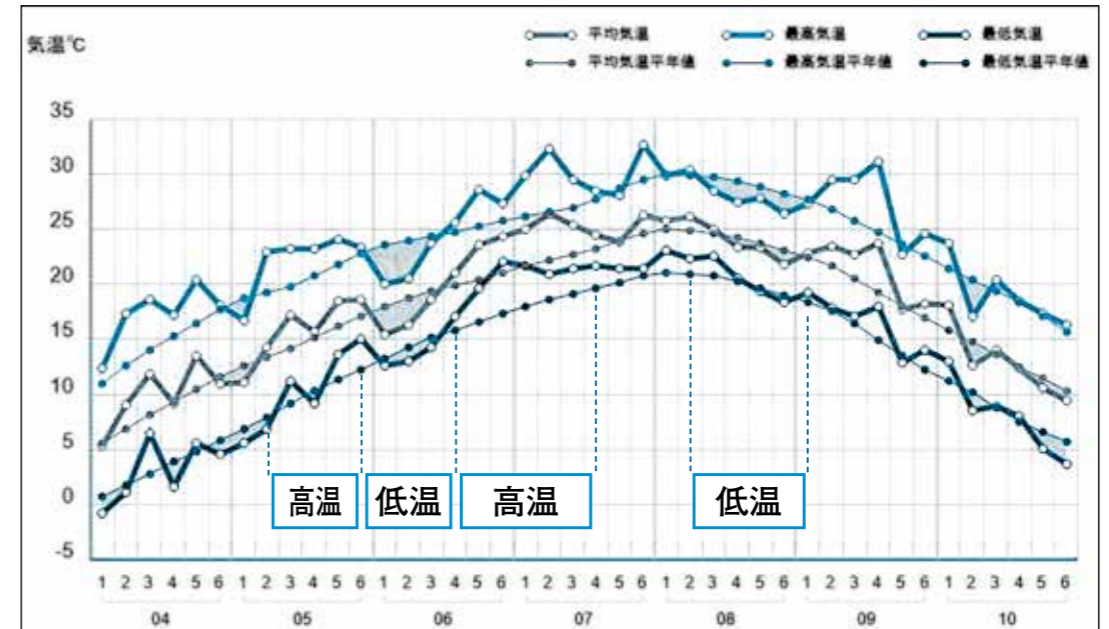


令和4年度 総括版

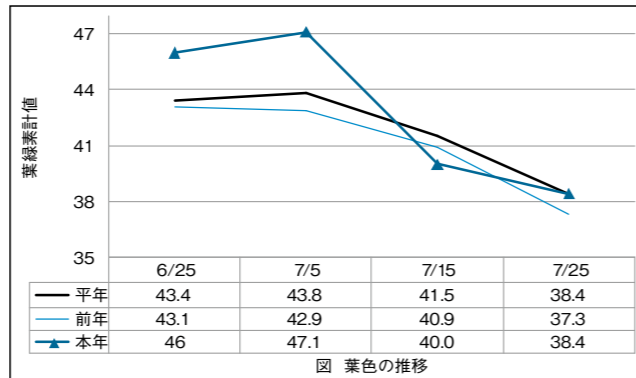
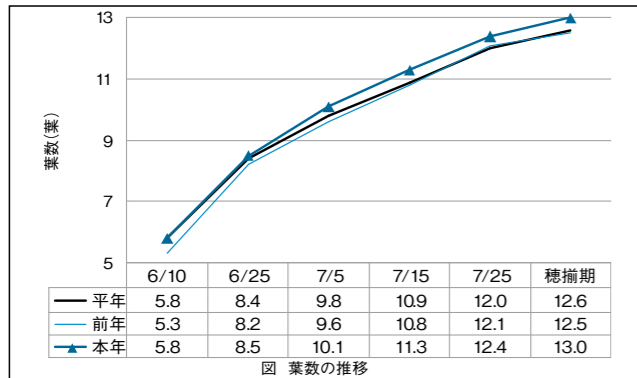
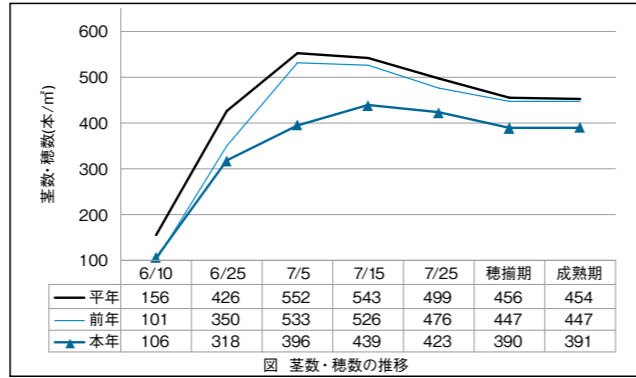
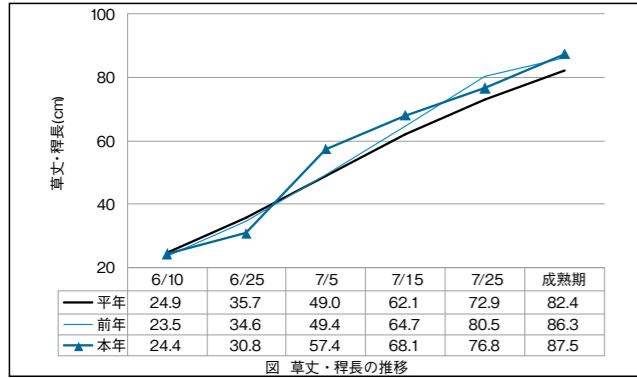
令和4年の稲作を振り返ります。皆さん自身の作業を思い出しながら、来年の対策を検討していきましょう。

気象経過及び生育状況

今年度気象経過（令和4年4月～10月、半旬別、アメダスポイント大曲）



生育概況



育苗期 ～やや徒長気味の苗質であった～

本年の播種盛期は4月24日（平年差早1日）でした。出芽～緑化期にあたる5月上旬は、気温は低かったものの日照時間は多く推移したため、出芽ムラや、ハウス内の急激な気温の上昇による徒長・葉ヤケ症状を呈した事例が見られました。一方、ここ数年多発していたもみ枯細菌病の発生はそれほど多く見られませんでした。

田植期～分けつ期 ～低温日照不足により初期生育難。分けつ少ない～

本年の田植始期は5月14日（平年差早2日）、田植盛期は5月21日（同差早2日）と平年より早くなりました。5月下旬は夜温が高く推移したため、気温の日較差が平年よりも小さく、分けつが確保しにくい気象でした。また、6月上旬は最高気温がかなり低く、日照時間がかなり少なく推移したことから生育が停滞しました。このように今年では初期生育の確保に苦労したほ場が多く、特に活着期に低温に遭ったほ場で顕著に見られました。その影響から、水稻定点調査ほの㎡あたり茎数は、6月10日で平年比68%、6月25日で同75%、7月5日で同72%となりました。

幼穂形成期～減数分裂期 ～草丈長く、分けつ依然として少ない～

6月下旬からの天候回復によって、生育は挽回しつつありました。ただ、生育初期に吸収されなかった肥料、地力が7月以降に吸収されはじめ草丈が長くなりました。東風の影響で一時的に葉色が淡くなりましたがその後は回復しています。㎡あたり茎数は平年比85%まで回復しましたが依然として少ない水準です。

出穂期～成熟期 ～出穂期平年並みも低温日照不足で登熟緩慢～

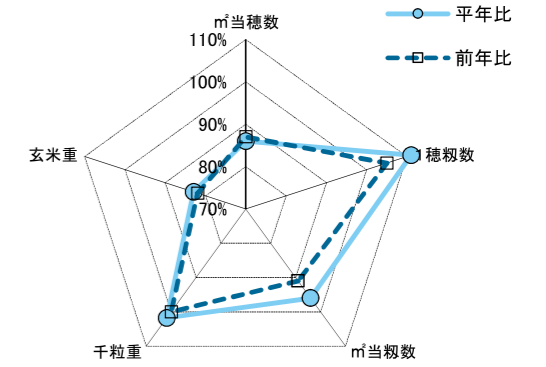
本年は葉数の展開が早く出穂が早まると見込まれましたが、増葉した株が多く見られたことから出穂期は平年並の8月2日となりました。8月中～下旬は気温が低く、日照が少なく推移したことから登熟は緩慢に進みました。9月中旬から10月上旬にかけては少雨・多照で推移したことから、刈取始期は9月21日（平年差遅1日）、盛期は9月30日（同差遅1日）で概ね平年並に進みましたが、10月2半旬以降断続的な降雨があったことから終期は10月15日（同差遅5日）と遅くなりました。

作柄概況

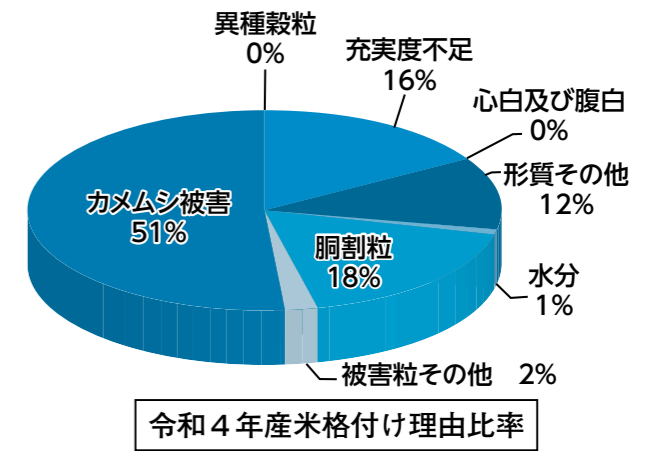
令和4年10月14日に東北農政局が公表した秋田県の米の収穫量は554kg/10a（ふるい目1.90mmベース：517kg/10a）の作況指数「95」、県南地域の収穫量は571kg/10a（同：537kg/10a）の作況指数「97」のやや不良でした。

水稻定点調査ほにおける収量（ふるい目1.90mm）は平年よりかなり少ない491kg/10a（同83%）でした。収量構成要素を見ると㎡当たり穂数は391本（同86%）と平年よりかなり少なく、一穂粒数は75.7粒（同111%）、でかなり多く、㎡当たり粒数は29.5千粒（同96%）で平年より少なくなりました。また、登熟歩合は77.8%（同差-8.0ポイント）とかなり低く、千粒重は23.2g（同102%）とやや重くなりました。本年は、初期生育の停滞に伴う茎数不足の影響で穂数を確保できなかったこと、登熟期間の日照不足による登熟歩合が低下したことが、大きな減収につながりました。

J A秋田おぼにおける令和4年11月9日現在の品位等検査結果（水稻うるち玄米）は、1等米比率98.6%となっていますが、充実度不足や着色粒（斑点米カメムシ類）による落等が目立っています。



定点調査ほの収量構成要素(平年/前年比)



	玄米重 kg	穂数 本/㎡	一穂粒数 粒/穂	㎡当り着粒数 千粒/㎡	登熟歩合 %	千粒重 g
本年値	491	391	75.7	29.5	77.8	23.2
平年比・差	83%	86%	111%	96%	-8	102%
前年比・差	82%	87%	105%	91%	-2.1	100%

病害虫の発生状況

いもち病

BLASTAM（アメダスデータを用いた葉いもち発生予測プログラム）において、6月6半旬、7月5・6半旬に感染好適日が出現しており、一部ほ場で多発しました。梅雨明けが特定されない気象条件だったことから、葉いもちの発生が多かったほ場を中心に、穂いもちの発生が確認されました。

紋枯病

本年は出穂期が平年並だったこと、出穂後の気温が低く推移したことから、生育期間をとおして茎数が平年よりやや少ない～平年並で推移したことから、少発生に抑えられました。

斑点米カメムシ類

病害虫防除所から斑点米カメムシ類についての、注意報が7月26日、8月9日、防除対策情報が8月24日に発表されました。本年は斑点米カメムシ類の発生時期がやや早く、発生量も注意報が発表されるほど多くなりましたが、出穂期10日後頃の適期防除に加え、出穂期24日後頃の追加防除も多くのほ場で実施されたことから、斑点米カメムシ類による着色粒の発生は低く抑えられています。